

古高ドイツ語における対語 (Wortpaare) 2

——Otfrid における inti と joh による半詩行内対語を中心に——

飯 嶋 一 泰

3. 古高・初期中高・中高ドイツ語および隣接ゲルマン諸語における対語

本章では、前稿（飯嶋 2009: 126ff）でリスト化した対語のうちいくつか特に重要と思われるものを選び、Otfrid 以外の古高ドイツ語 [以下 ahd. と略] や初期中高ドイツ語 [fmhd.]、中高ドイツ語 [mhd.]⁽¹⁾ における類例の検証、さらに隣接するゲルマン語 [germ.] や現代ドイツ語との比較対照をとおして、Otfrid が使用した対語の特徴、そしてドイツ語史におけるそれらの位置づけを考える。

3. 1. hus inti hof

themo zi Romu druhtin grap/ joh hus inti hof gap (Nr.1 = S-030)⁽²⁾

「その者（＝ペテロ）に主は墓所、そして家と屋敷（支配の座）を与えた」

この対語は、Otfrid がコンスタンツ司教 Salomon に宛てた献呈詩 Salomoni Episcopo Otfridus の上記 1 例のみ記録されている。Otfrid 以外の Ahd. 文献には全く例証されていない。一見 grap も含めた三重語 (Drillingsformel) のように見える。しかし、grap と hus の間の joh に比べて、hus と hof の間にある inti がより小さく緊密な単位のペアを結ぶ接続詞であること（飯嶋 2009: 124f）、hus と hof が頭韻によって結ばれていることから、当該箇所は "grap + hus + hof" ではなく、"grap + [hus + hof]" と解される (grap ~ gap の脚韻形成もこの配語に関与しているが)。もちろん、構成要素の意味から考えて、hus + hof が、grap に対して結束度の高い組み合わせであることはいうまでもない。その hof の意味であるが、Karg-Gasterstädt/Frings: Ahd.Wb. (Bd.4,1165ff) はこれを、1) (zu einem Gebäude gehörender) umgrenzter Platz, eingehetzte Fläche, 2) ländliches Anwesen, Besitz, Bauernhof, Wirtschaftshof, 3) Sitz, Machtbereich eines Herrschers, Herrscherhof unter Einbeziehung der (...) dazu gehörenden Personen と 3 大別し、当該対語を 3) の末尾に置いている。しかし、論者は本義 1) の hof が hus と対語「家と屋敷」を形成し、それが全体として「支配の座」という暗喩を生んでいると解釈する⁽³⁾。ただし、単一語 hof の出現が Otfrid においてはこの 1 箇所のみであり、対語も他に例証がないので、転義についても決定的なことはいえない。

なぜ、論者がこの孤立した1例に注目するかといえば、それは同じ表現が今日でも Haus und Hof「家屋敷：全財産」として広く世間に通用しているからである。もちろん、ahd. hus inti hof がそのまま連綿と、断絶なしに今日まで継承されたという確証はない。また、Jeep (1995: 129) も指摘するように、頭韻を踏んでいることがそのまま古来の（ひいてはゲルマン的）伝統を保証するものでもない。しかし、脚韻詩のパイオニア Otfrid によりあえて織り込まれたこの頭韻対語が、広く人口に膾炙し聴衆の理解・共感を促す慣用表現であった可能性は高いように思われる。以下、Fmhd.、Mhd. および隣接する諸言語における事例を吟味して、当該表現の素姓を考えたい。

論者が確認できた範囲で、また Friedrich (2006: 231) が挙げているものの中でも、Otfrid に次いで古い例証は Fmhd. の Spec 95,10にある so lat ir wib unde kint, eigen unde lehen, hus unde hof である。Spec は12世紀後半の比較的早い時期に成立したと推定される説教集であり、Otfrid からすでに2世紀半が経過している。だが、wib unde kint, eigen und lehen と並べて計3組の対語が列挙されている様は、これらがそれなりに認知された慣用表現であったことを推測させる。

Mhd. 期（盛期以後）に入ると、各テキスト種にわたって例証が見られるようになる。Friedrich (2006: 231) が引用しているものを含め、論者が原文で確認できたものの一部を若干の変種も含めて挙げると、Ein vihe, daz lützel sinne hat,/ swenn ez ze dorf von velde gat,/ so erkennet iegelichez wol/ hus und hof, darz komen sol:/ so trinket leider manic man,/ daz er hus noch hof erkennen kann (Freid 94-17ff); da er inn haus vn hof hat (Urk 1800A-123-7); Ein iklich man, der hus unde hof hat, der mac buwen uf dem sinen, waz he wil (FreibergStR 1-32), klagt zu huse unde zu hofe (ib.8-1), zu sime huse unde zu hive (ib.33-3); Almusen barmherzigkeit/ Din hus und din hof vermeit (HvNstGZ 6702f); der bischof:/ beide hus unde hof/ liez er nicht im bliben(MarlgPass 8-33ff); Du solt deines nechsten guot nit begeren, weder hauß noch hoff (Eckh 2-464-4f) などがある。以上を見ると、現代語の Haus und Hof と異なり、前置詞 (ze) や冠詞類 (din, sin) による拡張が自由であることがわかる（この点については後述する）。Friedrich はこの対語を基本的に法律用語としてカテゴライズしているが、実際上記 FreibergStR に優に30を上回る例証が見られるほか、13世紀の証書類に使用されている。一方、盛期の宮廷叙事詩などでは稀であり、コンコーダンスで調べてみても、たとえば Tr と NL において hof は頻出するものの、主として「宮廷」の意味（フランス語 cour からの意味借用）であり、hus unde hof の例証は皆無であった（ze hove の形が圧倒的に多く、対語としてはむしろ Tr 11431ほかの ze hove und in dem lande が目立つ）。興味深いのは、Parz 667-19f に逆配列の in des hove unde des hus/ が見られることである。この配列は、作品のキー概念である「宮廷」を「屋敷」に先置させる（全体としては「宮廷である屋敷」を表す）意図と／あるいは脚韻の要請（ここでは Artus との押韻）によるものと思われる。Friedrich (2006: 224) はこの逆配列も見出し語として立項しているが、Mhd. においては稀なパターンであったようだ（ちなみに FreibergStR では全用例が hus 先置）。

低地ドイツ語 [nd.] に目を転じると、古ザクセン語 [as.] に当該対語は確認されないものの、類似表現として同じく頭韻を踏んだ *hobos endi hiwiski* 「屋敷と家族 (を捨てた)」が Hel 3310 に 1 例見出される (その前行にある頭韻対語 *egan endi erbi* 「所有物と遺産」と並列関係にある; Otfrid 2-02-022 の *in eigan joh in erbi* 参照)。中低ドイツ語 [mnd.] では、Mhd. と比較しうる対語が流布しているが、ここでは *hof* が先置されるパターンが目立つ: *to hove unde to huse* (SSp 113-8, 259-19), *to deme hove oder to'me huse* (ib.162-13f), *to hove oder to huse* (ib.259-9, 291-43f), *to sime naesten hus oder to sime naesten hove* (ib.314-17); *to hove vnde to huse* (StaStR I,10); *to deme hus. Oder to deme houe* (LüStR 51) など。

しかし、とりわけ豊富な用例が見出されるのは、古フリジア語 [afries.] の諸法令集においてである。ここでは明らかに、逆配列の *hof* and *hus* が優勢であり (RR 4-20; ER A-4-24ほか)、*hus* and *hof* は少数派である (ER C-V-32ほか)。試しに ER における例証をカウントしたところ、*hof* 先置 21 例に対し、*hus* 先置は 3 例を数えるのみであった。*hof* が先置される 1 つの要因としては、法的係争の文脈でたとえば「家・屋敷への接近・侵入」という観点から、「屋敷地」が「家屋」より先に到達されるという位置関係を考えることもできよう。Mhd. や Mnd. と同様、Afries. でも前置詞や冠詞類による拡張は *ti howe and ti huse* (HR 3-6), *inur hof and inur hus* (ib.12-56); *et houi and et huse* (RR 4-22), *yn syn huß vund an syn hoff* (ib. 4-2) など多種多様な形で行なわれている。これは、*hof* と *hus* の個別的意味がなお十分に生きており、それぞれ必要に応じたモディファイが加えられたものであろう。その意味では、対語の慣用句化は不十分であったともいえる⁽⁴⁾。上記から、中世盛期の大陸ゲルマン語においてこの対語が広範囲に用いられていたことが明らかになった⁽⁵⁾。Mnd. および Afries. における逆配列の優勢は、ことによると二元発生 (あるいは多元発生?) を示唆するかもしれないが、仮に Mhd. に限定しても、対語の広範な使用状況は、相応の年月をかけて達成されたものと想定される。しかし、それに要したであろう年月が Otfrid と Spec の間に横たわる 2 世紀半を埋めるに足るものか否かに関しては、何ともいいがたい。仮に、Otfrid から中世盛期まで 1 本の糸がつながっているとすれば⁽⁶⁾、そしてそこから新高ドイツ語 [nhd.] を経て現代ドイツ語までの連続性が確認できれば、この対語はドイツ語に現存する最古のものの 1 つということになるだろう。今日この表現は「全財産、一切合財」の意味に抽象化して、*er hat Haus und Hof verspielt (vertrunken)* といった (やや陳腐化・皮肉化した) 文脈で使われる傾向が強く、法律用語としてはとうにその使命を終えている。しかし、インターネットで検索すると、不動産会社のネーミングに利用されていたりもして、しぶとくそのアクチュアリティを維持しているようだ。

3. 2. *dages inti nahtes etc.*

Dages inti nahtes/ fleiz si thar thes rehtes; (Nr.8 = 1-16-013)

「昼も夜も、彼女は正しきことに努めた」

dages inti nahtes/ so thenket io thes rehtes; (Nr.33 = 4-07-084)

「昼も夜も、あなたたちはつねに正しきことを意図せよ」

thie dages joh nahtes thuruh not/ thar sancte Gallen thionont! (Nr.188 = H-168)

「昼も夜も熱心に、聖ガルスに仕えているところの（修道士の共同体）」

反義語による対語で、文字どおりには「昼にそして夜に」ということだが、現代語の Tag und Nacht と同様に（原義を保ちつつ）実質上「四六時中」を表す。文法的には、dages は副詞的 2 格、nahtes はその類推による語形である（cf. nhd. nachts）。（ほぼ）同じ対語は、Ahd. において B 206-14 および 212-34 に tages indi nahtes [= die noctuque]、253-21 に tages ioh nachtes [同前]、T 7-9 および 122-3 に tages inti nahtes [= die ac nocte, L 2-37⁽⁷⁾, 18-7]、MPs 1-2 に dages inde nahtes [= die ac nocte]、Gl 1-735-47 に (ta)kes enti nahtes [= nocte et die, Lc 2-37] として例証され、Ahd. 末期の N にも各所で用いられている：tages ioh nahtes (Nb 239-3); tages unde nahtes (Nc 729-11 [= noctibus universis]); tages unde nahtes (Np 103-26 [= die ac nocte, Ps 31-4]), tages ioh nahtes (ib. (Npgl) 147-8 [= die ac nocte]), tages unde nahtes (ib.154-5 [= die ac nocte, Ps 41-4]), tages ioh nahtes (ib.278-30)。N にはさらに副詞的 4 格の tag unde naht (Nc 797-18 [=pernox]) および tag unde naht (Np 3-20 [= die ac nocte, Ps1-2]) があるほか、本来の名詞として des tages ioh tero naht (Nc 840-32 [= diei noctisque]); in dagen ioh in nahten (Nc 841-1); tag unde naht (Np 349-3) が見られる⁽⁸⁾。以上はすべて tag 先行の事例であったが、逆配列は T 53-5 および 76-1 に nahtes inti tages [= nocte ac die, Mc 5-5, 4-27] が、Gl 1-809-40 に副詞的 4 格の eine naht unta einen tach [= nocte ac die, 2Cor 11-25] が例証されている程度である。したがって、管見の範囲では tag(es) inti naht(es) が Ahd. における優勢なパターンということになる。ただし、これらの用例の大半はラテン語 [lat.] からの翻訳であり、特に行間逐語訳の B やそれに近い T の事例は、基本的に原典を踏襲しているため、判断材料としての価値は低くなる。Otfrid に立ち返ると、問題の 3 箇所のうち 1-16-013 は serviens nocte ac die (L 2-37) が下敷きとなっていると考えられるが、昼夜の順序は逆となっている。ただし、この箇所と 4-07-084 の配列には韻律が関与しているのも事実である（仮に nahtes inti dages とした場合、脚韻的に不純度が増大する上、dā-ges は zweisilbig volle Kadenz として破格となる⁽⁹⁾）。結局、Ahd. においていずれの配列が一般的なものであったか推し量ることは困難であるが、N の浩瀚な著作群において tag(es) unde naht(es) のみが用いられていること（そのいくつかは noctibus universis や pernox の「自由訳語」である）や、O 1-16-013 と Gl. 1-735-47 が原典に反して dag (tag) を先置していることを考慮すると、こちらに多少の利を認めることができようか。

ところが、Fmhd. 期に入ると同一文献で両様の配列があるケースが目立つようになる。慣用句化していないものも含めて、いくつか典型的な事例を挙げる：dri tage unde dri naht/ (WGen 77),

naht unde tach/ (ib.3203); tages unde nahtes (ÄPhys 77), naht unde tac (ib.75); tac unt nacht/ (Rol 3499), nacht unt tac/ (ib.6998); tages unde nahtis (Spec 77-15), naht unde tac (ib.126-4)。このように両配列を併用する一要因として、詩文に関しては脚韻の要請が考えられよう。Fmhd. の脚韻は、いまだ Ahd. の延長線上にあり、母音韻や強勢のない最終音節のみの押韻が許容されている。引用例の中でも、WGen の naht は chraft と、Rol の nacht は herschlapht との押韻であり、Otfrid と五十歩百歩といえようか (Otfrid の名誉のために言い添えれば Ahd. は非強勢母音の曖昧音化を経ていないため音節の種類が多く、古典期 Mhd. のように完璧な押韻は困難であった)。それだけに、詩作上の工夫が語順に反映されることはありうるが、両配列の並存を脚韻のみに帰すのはやはり無理があろう (ÄPhys や Spec 等散文の例を見よ)。いずれのパターンも日常語に (頻度の差はあったにせよ) 流通していたか、少なくとも文語としての使用に大きな抵抗はなかったと想定される。

Mhd. では、やはり両配列が並存しているが、詩文では naht unde tac が優勢であるように見受けられる。たとえば、Tr では tac unde naht/ が7394の1例に対して、naht unde tac/ は1842, 12988, 13679, 18434, 19051, 19424の6例を数える (ともに拡張形を除く)。また、Greg では naht unde tac/ が342, 891, 2292, 3450, 3746の5箇所にあるのみで、tac 先置は皆無である。その要因のひとつとしては、やはり脚韻が考えられる。naht と平仄が合うのがほぼ maht に尽きるのに対して、tac は上の11箇所だけで mac, lac, bewac, phlac と組み合わせられており汎用性が高い。一方、散文においては、tac unde naht がより広範囲に用いられているようだ。13世紀の証文からの例 (Urk 109-154-30ほか) もそうだし、まったく別ジャンルの PrBerth を見ても19-35, 340-5, 365-3など同様の配列となっている。Friedrich (2006: 308 & 400) は naht unde tac と tac unde naht をともに立項しているが、前者の用例は大半が詩文から引かれている一方、後者では散文・詩文が拮抗している。なお、Otfrid と同じ副詞的2格の tages unde nahtes は Fmhd. 期を過ぎると使用頻度が落ちるようである (単独の tages と nahtes はそれぞれ tags と nachts として現代まで生き延びるが)。Friedrich (ib.) は、tac unde naht と並べて tages unde nahtes を掲げているものの、実例としては Fmhd. の dagis unti nahtis (Anno 18-5) を除けば Prosalancelot から1例を引いているのみである (nahtes unde tages は言及すらされていない)。詩人の立場から見れば、nahtes と tages は押韻的に煮ても焼いても喰えない代物で、行末に置くことができない (単独の nahtes あるいは tages であれば行末を避けることは容易だが対語になると処遇が面倒となる)。とはいえ、散文も含めて考えれば、語形的に短く簡潔な副詞的4格が単純に好まれたということかもしれない。以上、Ahd. から Mhd. にかけて概観してきたところをまとめると、本来 Tag und Nacht (tags und nachts) にあたる表現が主流であったが、配列はつねに可変的であり、Mhd. 期以後詩文においては Nacht und Tag が好まれる傾向が生じた、ということになろうか⁽¹⁰⁾。

次に Nd. についても一瞥すると、As. においては規模こそ小さいが Ahd. と通ずる状況が確認

される。Hel 515および2480、そしてGen 181に *dages endi nahtes*/、Hel 2482に *nahtes endi dages*/ の計4例である⁽¹¹⁾。これだけ見ると3対1で *dages* 先置が優勢ということになるが、慣用句化していない用例も考慮すると異なる様相が見えてくる。つまり、*tua naht endi dages*/ (Hel 3981), *fiuuuar naht endi dages*/ (ib.4084, 4131) において *naht* が先置されている。つまり「二夜昼、四夜昼＝二日間、四日間」ということである⁽¹²⁾。これにはゲルマン人が日を夜で数えたことに由来するという説もある（有名な『ゲルマニア』11章！）が、そこまで遡らずとも、中世に慣習的に行なわれていた日数表現が基盤にある（同じHel 1053に見える *fiortig nahto* 「四十夜」、Mhd. の *Iw 2763* の *siben naht* や *5621* の *vierzehen naht*、Mnd. では SSp 51-5 の *virtenacht*、さらに現代英語の *fortnight* など）とは考えられよう。Mnd. では、Mhd. と同様に副詞的2格の対語は後退し、副詞的4格ないし前置詞句が支配的となる：*under dage unde (under) nacht* (SSp 55-17f, 291-31); *nachtes ofte dages* (StaStR 5-5), *bi nachte ofte bi daghe* (ib.10-2); *nacht unde dach*/ (RO 1417); *dach vnde nacht*/ (RV 4477, 5002, 6762), *nacht vnde dach*/ (ib.5575), *by daghe vnde nachte*/ (ib.3293), *by nachte vnde ock by daghe*/ (ib.392)。ここでも両配列が並存している。詩文に関しては、押韻が役割の一端を演じている（*dach* ～ *mach*, *daghe* ～ *laghe*, *nacht* ～ *macht*, *nachte* ～ *wachte*）が、散文も含めて考えれば、現状把握以上の憶測は控えるべきであろう。

Afries. では、*thes dis antes nachtes* (RR 10-10); *dey and(a) nacht* (ER A-7-83, A-8-36, C-1-46, C-1-267, C-5-47), *deij and nacht* (ib.B-5-2) のごとく *di* (*dey*) が先置されるパターンが支配的である。類例でも *twia fiuwertih dega and nachta* (RR 1-1) や *binna di and binna nachtes* (RR 15-9c) といった形で同配列となっている。逆配列の例としては、WR 13-1b の *nacht ende dey* などもあることはある。Ae. でも、予想 (*night and day!*) に反して *dægges and nihtes* が一連の頭韻詩 (*Beowulf* 2269; *Genesis* 2351; *Elene* 198) や散文 (*West Saxon Gospel*, Mc 4-27, 5-5, L 2-37 [= *nocte ac die!*], L 18-7 [= *die ac nocte*]) などで一般的であったようだ。ただし、ここでも As. と同様、日数表現として *þreo niht and dages* (*Genesis* 307) のように *niht* が先置されるケースがあるのは興味深い。

古代ゲルマニアの時代には昼でなく夜の数が数えられ、夜が昼に対して（冬が夏に対するのと同様）優先権を付与されていたのかもしれない。しかし、中世の西ゲルマンでは昼は夜に対して少なくとも対等の権利を、場合によっては優越性を確保していたのではないかと考えられる。つまり慣習と実用の両面から、時に昼が、時に夜が先置されたのであろう。しかし、この対語が慣用句化し、「昼にも夜にも」が実質上「四六時中」を表すようになった時点で、言語により方言により両配列の並存が徐々に解消され、一方に収斂する傾向が生じたのかもしれない。ドイツ語の *Tag und Nacht* と英語の *night and day* はそのような道を辿って今日に至ったのではない。

3. 3. wib inti gomman, gomman inti wib etc.

worolt mihil so gizam/ wib inti gomman. (Nr.20 = 3-06-010)

「それにふさわしく大勢の人々が、女と男が（やって来た）」

so was so in erdu habe lib,/ thaz si gomman inti wib, (Nr.45 = 5-16-030)

「この地上で生命を持つものは、男であれ女であれ」

Thaz si gomman joh wib/ (in thiu se wollen haben lib, (Nr.69 = 1-11-007)

「男であれ女であれ、彼らが生命を保とうとするかぎり」

salida zi libe,/ gommanne joh wibe; (Nr.74 = 1-16-018)

「至福がとこしえに、男にも女にも（やって来たと伝えた）」

gommane joh wibe,/ unz er was hiar in libe (Nr.145 = 4-31-016)

「男にも女にも、彼が生きてここにいた間（つねに良きことをした）」

前節と同じく反義語による対語で、文字どおりには「男と女」であるが、実質的に一般化した「すべての人々」を意味している。これはとりわけ、3-06-010で *worolt mihhil* の、5-16-030で *so was so in erdu habe lib* の言い換えとなっていること、同箇所および1-11-007で *thaz si ... (= es sei...)* の構文を取っていることから明らかである。また、5-16-030の前行に次節で扱う *Arme joh thie riche* 「貧しき者も富める者も；誰もが」が置かれていることも、この対語が一般的、すなわち「不定代名詞」的用法であることを裏打ちする。

配列は *wib* 先行が1例、*gomman* 先行が4例であるが、すべて第2構成要素が脚韻を構成している。*-zam ~ -man* は母音韻だが、*wib ~ lib* および *wibe ~ libe* は Mhd. における常套の押韻の先駆けといえる。Ahd. では、ほかに T 100-3に *thaz thie dar tetta fon anaginne gomman inti wib* 「その方（神）は始めに男と女を作った」 [= *quia qui fecit ab initio masculum et feminam*, Mt 19-4] の1例がある。ただし、この例は文字どおり「男と女」を表し、一般化した「人々」ではない。

Ahd. における「男と女；人々」を表す対語としては、*gomman inti wib ~ wib inti gomman* 以外に、*man* と *wib* によるものが、数例記録されている (Karg-Gasterstädt/Frings: Ahd.Wb. Bd.4,172) : *er sinen iungerun, wiben unde mannan, irscein* (WB 138-28ff); *er sinen iungeren irscein, uuiben ioh mannun* (BB 138-28f), *mit mannen ioh mit wiben* (ib.147-11); *ez si wib oder man* (Benediktbeurer GB 3-357-21); *daz man unde vuib sament iro ze himele fuorin* (Nc 813-18 [= *ut uterque sexus cum Philologia posset ascendere*]). なお、*gomman* と *man* は「夫」、*wib* は「妻」をも意味し、これらが対比的に用いられることもあるが、「夫婦」の意味で対語を成す例は確認されない (Nc 690-7に *des comenes unde dero brute* 「夫と嫁の（契り）」はあり)。例証が少ないので、配列に関しては何ともいえないが、*wib* 先置もそれなりに使用されてはいる。

そもそも Ahd. で「男」を表す語には、wer, gomo, man, gomman, thegan などがあった。これらは、Germ. 内外に対応語を持つ古来の語で、wer はゴート語 [got.] の wair や lat. vir と、gomo は got. guma や lat. homo と、man は got. manna と、そして thegan は anord. þegn やギリシャ語 [gr.] の téknon と対応する。しかし、wer は語句注解における数例を残して死語化し（複合語 weragelt = Wergeld などに残る）、gomo も廃れつつあったようで Otfrid と I, M および語句注解以外には現れない（複合語 brutigomo = Bräutigam に残る）。thegan は「戦士；英雄」のニュアンスが強く（mhd. degen）、Otfrid には50回近く現れるが好んで「使徒」の意味で用いられ、一般的な「男」とは異なる。man が当時最も一般的な表現であり、lat. vir の訳語としても homo の訳語としても広く用いられていた。Otfrid におけるその例証も500回近くに及んでいる。一方、彼はわずか7例だけだが gomo も使用している。これは、主に洗礼者ヨハネ、アダム、ダビデなど傑出した人物を指しており、あえて「雅語」を当てたのかもしれない。本節で論じる対語の一端を成す gomman は、この gomo と man による複合語である。man が「男」のみならず、一般的な「人間」をも意味したため、「女」としての wib との対比を明確化するために規定語 gomo を冠したものと考えられる（Ae. において「女」を wifman として区別化したのと対照的）。なお、この gomman は gomo よりは広く例証されており、Otfrid に16例あるほか、語句注解のみではあるが派生語 gommannin も記録されている。一方、Ahd. で「女」を表す主な語には wib (= Germ. 外に対応語なし) と quena (= got. qino, gr. gunē) があった。quena が一般に「妻」を表したため、広く「女」を指す語としては wib が用いられた。このほか、Mhd. の宮廷文学でキー概念となる frouwa「貴婦人」（fro「主人」からの派生語）も、2例のみながら Otfrid に出現しており、特に興味深いのは1-05-007で、聖母マリアを指して zi ediles frouun/ と述べているくだりである。結局、Otfrid は対語としてはやや格調高く意味的にも明瞭な gomman とごく平凡な wib を採用したことになる。そして、gomman 先置を多用したわけだが、その要因としては、（当時の価値観として）優位にある男性を重んじたこと、しかもその際 gomman という詩的效果のある表現を際立たせること、そして押韻が容易な wib(e) を行末に置くことなどが複合的に作用したと考えられる。一方、長文肢後置の原則からすると、gomman が先に来るのはやや安定感に欠けるきらいがあるともいえよう。

Fmhd. 期に入ると、gomman の出現頻度はますます下がり、対語はもっぱら man と wib によって形成されるようになる。odo などによる類例も含めて示すと次のようなものがある：man unt wib/ (WGen 609); wib unde man/ (MemMori 1); iz si uuib odo man (Merigarto 75); wib undi man (ÄJud 172); wib(p) unde man/ (JJud 335, 1767), man unde wip/ (ib.938); under wiben unde mannen/ (MGen 43-20); man joch wib/ (Siebenz 32); wip unt man/ (Rol 5797); bediv man unde wib (Spec 107-12), ein iegelich wib unde man (ib.98-30), managim wibe unde manne (ib.70-14) など。意外に wib 先置が目立つ。詩文では、wib は Otfrid や後の Mhd. 期と同じく lib と完全かつ独占的

な脚韻を踏む一方、man は an, werden, chindan, gitan, slahen と多彩なカップリングを示す。また、散文の Spec においても wib unde man の配列が取られているのは興味深い。さらに、類例を求めると、ÄPhys 66に uuilon uuib. uuilon man が見られるが、この下敷きとなったのは aliquando masculus, aliquando femina であり、原文に反して uuib 先置となっている。

Mhd. でも、相変わらず wip unde man は多用され、man unde wip と拮抗している。その一端を示すと次のようなものである：manic man unde wip / (NL 601-6), beide man unde ouh diu wip/ (ib. 2256-8), wip und(e) man/ (ib.814-8, 1379-4, 1522,6), ez si wip oder man (ib.1791-6), weder wip noch man (1065-4); man unde wip/ (Tr 17413); man unde wip/ (Iw 3017, 7273, 7735, 8139), von manne und von wibe/ (ib.4399), under manne und under wibe (ib.2057), man noch wip (ib.3218), weder man noch wip/ (ib.3225), manne noch wibe/ (ib.7211), wip unde man/ (ib.3021, 4425, 7384, 7813), dez wip unde den man/ (ib.2987), wip noch man/ (ib.5451, 5550, 6145, 6429, 8018); beide man vn wib (Urk 93-140-9); Swelch man oder wip (FreibergStR 4-14), iz si wip oder man (ib.33-3) など。話を詩文に限定すれば、wip ~ lip、そして man ~ wan, dan, kan, an, began などの押韻が一定の役割を演じており、いずれの配列を取るかは意味内容よりも詩作上の工夫によったものであろう。特に、ez si (wære) wip oder man のパターンはそのまま一詩行を形成できるほどで、詩人にとって便利な "Vers-Baustein" であったと考えられる。それでも、このバリエーションが詩作の方便に留まるものでなかったことは、FreibergStR や証文における例証から理解される。したがって両配列が Mhd. の文語の確固たる構成要素であったことは認めざるをえない。なお、Friedrich (2006: 285f, 464f) も、両パターンを立項しているが、意味用法上の差異については特に言及していない。ともに、反義語による相補的対語として、実質上 alle, jeder という一般化した意味で用いられると解説している⁽¹³⁾が、その認識は論者も共有するものである。

Nd. での例証は十分に収集できなかった。As. では Hel に当該表現は見出されず、語句注解に次の一節が確認できる程度である：thar quam tho filo manno endi viuivo (Gl. zu Homilien Gregors; Wadstein 65,3 [= erat multi viri et feminae])。Mnd. では man unde wif (SSp 4-2, 18-1), neweder man noch wif (ib.14-31f.), it si wif oder man (ib.17-3, 204-8f), se sin wif oder man (ib.300-12); wyff efte man/ (RV 2446) と、Mhd. と同じく両配列が競合している。Afries. でも ieftha を介してではあるが、en mon ieftha en wif (RR IV,16); en mon iefte (iefta) en wif (ER B-9-22, B-9-50), mon ieftha wif(f) (ib.C-5-14, C-5-61), wiff ieftha mon (ib.C-5-64) など並存している。

以上概観した対語の中世期における使用を総括すると、今日の Mann und Frau とはかなり意味・用法が異なっていることがわかった。つまり、中世においては、「男と女」という原義を保持しつつも、実質上は一般化・不定代名詞化した「皆、誰も、人々は」という意味を表すのが通例であった（中には「神が男と女を創った」とか、法律文書のように「男」と「女」の対立が際立っているケースもあるが）。しかるに、現代ドイツ語において Mann und Frau ないし Frau

und Mann は、一定頻度で用いられるという意味では慣用句（慣用句的対語）といえるものの、その一般化・不定代名詞化した意味を大きく失い、原義に近い「男と女・女と男（たとえば社会的・生物的作用において）」か、場合によって「夫婦（Ehemann und Ehefrau、つまり Eheleute）」を表す。このことは、前節で扱った *dages inti nahtes* や、今回は論じられなかったが、3-06-040 の *alten inti jungen* と異なる発展傾向である。このいわば「逆方向」の発展、つまり慣用句性の減衰がいかにして生じたかを跡付けることは本稿の目標を大きく超えるが、興味深いテーマではある。なお、上で繰り返し確認した中世における当該対語の配列であるが、（少なくとも詩文の場合）押韻や表現の必要上決定されたものと考えられる。ただ、それにしても当時明らかに優先度が高かった「男」が後置されるケースが多いのが気になる。これは、今回扱わなかった *fater inti muoter* (mhd. *vater unde muoter*) の場合などと比べても顕著である。「父と母」「王と王妃」などが社会制度をより明確に反映する概念であるのに対して、「男と女」はときに制度的問題を離れ、生物的・生活的な相互依存関係において捉えられることもありえたからであろうか。

3. 4. *armer joh ther richo etc.*

gab armer joh ther richo/ antwurti gilicho (Nr.76 = 1-17-036)

「卑しき者も高位の者も、同じように答えた」

arme joh riche/ giangun imo al giliche (Nr.79 = 1-27-008)

「権勢なき者もある者も、彼には皆同じように大切であった」

richen joh armen;/ laz sia thih ouh irbarmen! (Nr.117 = 3-10-022)

「強き者も弱き者も（あなたは助けられる）；彼女にも憐れみを与えたまえ」

Arme joh thie riche/ so gen iu al giliche, (Nr.161 = 5-16-029)

「貧しき者も富める者も、あなた方には皆同じように大切である」

これも反義語 *arm* と *richi* による対語で、意味的には原義「卑しきものと権勢ある者」を保持しつつ一般化・不定代名詞化した「皆」を表す、という点において前2節で扱ったものと通ずる。また、Mhd. を経て現代語に至るという経緯もそれらと比較しうる。ただ、今日の *arm* ~ *reich* が何より経済的な裕福～貧困を意味するのに対して、Ahd. の対応語は権勢・力、それに次いで経済的な貧富を表す点に注意が必要である。つまり「皆」を表現するための比喩の拠りどころに差異があるということだ。対語の配列を見ると、*arm* 先置が3例、*richi* 先置が1例となっており、現代語の配列とおおむね一致する。ただ、身分制社会の当時を思えば、高位の者が後置されているのは重要性の原則に違反する。修道会的な清貧思想の表れと見られなくもないが、聖母マリアを「貴婦人」として描く Otfrid にはそぐわない。やはり、当時すでに定着していた慣用句を採用したか、あるいは押韻その他詩的表現を目的とした配語を行なったと考えるのが妥当であろう（なお下敷きになったと見なされる Lat. 原文はない）。しかし、意外なことに、この2つの形容

詞を inti (joh) で結んだ対語は Otfrid 以外の Ahd. テキストには一切例証がなく、当時慣用句化していたか否かについては何ともいえない。ただ、arm と richi の対比は、N に Hier arme. unde dar riche.(Np 34-26); Ih pin guoter arm. der ubelo ist riche (Np 289-22) として現れる。やはり、arm が先置されるのがノーマルであったのだろうか。なお、Otfrid における押韻を確認してみると、richi はすべて gelich (変化形および副詞を含む) と踏み、armen は irbarmen と踏んでいる。前者の方が、はるかに汎用性が高い押韻で、Otfrid も好んで用いている。少なくとも押韻が arm 先置を選択させる要因の一つであった、とはいえるであろう。

対語の例証が、Otfrid 以外の Ahd. 文献に見出されないので、Fnhd. に調査範囲を広げよう。Ahd. と異なり、随所で次のような表現に遭遇する：riche oder arme/ (WGen 2083), richen noch armen/ (ib. 1836); arme unde riche/ (JJud 153, 478, 784, 872, 884, 1767); arme unde riche/ (Ava 1-23-3), riche unde arme (ib.2-147-2); riche oder arme/ (MGen 45,6); den armen vnt den reichen/ HvMelkTG (545), vnder armen vnt vnder reichen/ (ib. 339); riche unde arme (Spec 139-1)。このように両配列が（時に同一文献で）混在している。押韻は、riche は多くの場合 Otfrid と同じく geliche (HvMelkTG では mis(se)leichen)、arme はやはり (er)barme(n) である。この押韻と前後文脈をにらみつつ、詩人が適切な常套的慣用句として、いずれかの対語を用いたものであろう。さて、その「常套的」という点であるが、この解釈を裏付けるのは、使用頻度のみではない。上に引いた JJud の arme unde riche を含む一節を、前後数行にわたって見てみよう (1775-1780)：

si ruften alle geliche,	彼らは皆同じように
arme unde riche	力なき者もある者も
bedu wip unde man	女も男もともに
den ir schephere an.	創造主に懇願した。
alte unde junge	老いも若きも
got si lop sungen...	神に讃えあれを歌った...

ここでは、wip unde man および alte unde junge を含めて3組の対語が並べられている。これは、3. 1. 節で扱った Spec における wib unde kint, eigen unde lehen, hus unde hof を想起させる。しかも、ここで3つの対語はいずれも「皆」という意味に一般化した不定代名詞的意味である。詩語に限定されていたか否かはさておき、これら対語が Fmhd. 期に慣用句として定着していたことは疑えないのではない（もちろんこれは Otfrid からの連続性を保証するものではない）。

Mhd. 期に入っても、この対語は広く用いられている。ただ、管見では arm 先置が優位に立っているようである (Friedrich: 107, 327は両配列とも立項しているが、前者に2倍程度のスペースを割いている)。その一端を示そう：Den armen unt den richen (NL 1128-1); arme unde riche/ (Tr 509, 8052), dem armen unde dem richen/ (ib.3489), arm oder rich/ (ib.15504); arme unde riche/

(Erec 195, 6527); rich(e) unde arme (Parz 194-22, 526-25); arm und rich/ (StrAmis 408), arm und riche/ (ib.790, 1329), die armen und die richen/ (ib.1310); arm oder rich (PrBerth 1-309-10); arm vnde riche (Urk 2302-426-22), richen vnd armen (ib.6-21-1); arm unde riche (FreibergStR 1-36), dem armen also deme richen (ib.32-1), arme unde riche (ib.34-6, 41-1), den luten armen unde richen (ib.48-1), riche oder arm (ib.38-4) など。以上、コンコーダンスを利用できた NL および Tr 以外は網羅的調査でないので、あくまで印象に基づく判断であるが、arm unde riche の配列が好まれていたことは確かのようなのである。脚韻の相手としては、相変わらず (ie)gelich(en) が選ばれ、その点でも Otfrid や Fmhd. との共通性が見出される。一方、arm(en) が押韻のパートナーに不自由する語であったことは事実で、少なくとも詩文において riche unde arm は行末には置きにくいというデメリットが大きかった（対語を離れても Tr において arm(en) と韻を踏んだのは erbarmen が1回、そして名詞! の arm が2回のみである）。散文でも arm 先置が優勢であり、とりあえず、Mhd. 期には arm unde riche の形がほぼ定着していたと考えてよいのではないか。また、この点で、Fmhd. 期 Mhd. 期を通じて配列に収斂傾向が見られなかった tac unde naht ~ naht unde tac や man unde wip ~ wip unde man と異なる動きが確認できて興味深い。

このように注目すべき対語ではあるが、As. での例証は皆無である。Mnd. 期に入ると、管見の範囲では、類例も含めて De arme also beswas also de rike/ (SSp 149-3); arm unde rike/ (RO 2-120), den armen unde den riken/ (ib.1122) などが見出された。RO における押韻相手は2例の ghelike および wiken であり、この点でも Mhd. と同じ伝統を形成していたようだ。また、Afries. でも、thene erma and thene rika (HR 18-6); tha erma also tha rika (ER A-4-10); dy arma asti rika (WR 35-16) など、arm 先置が支配的となっている。なお、以上のうち法律文書では多くの場合本来の「力なき者ある者も（差別なく）」という意味が前面に出ている。

最後に、現代における arm und reich (Arm und Reich) の意味・用法について付言すると、Duden Redewendungen は veraltend とした上で、“alle Menschen ohne Unterschied” と記述し、用例として Arm und Reich müssen das Gesetz halten, da gibt es keine Ausnahmen を挙げている。しかし、なぜ veraltend となったのか。今日でも貧富の差は依然として存在するが、それを現状肯定的・無批判的に不定代名詞 “jedermann” として用いることのグロテスクさに人々が気づき始めたからではないか。むしろ、今日では arm und reich は文字どおり「貧しい者と豊かな者」と解されることが多い⁽¹⁴⁾。この点で、（使用頻度的にはともかく）意味論的には一定の脱慣用句化（＝脱不定代名詞化）が見られる。前節で見た Mann und Frau の事例に通ずる現象といえよう。

3. 5. 中間決済

以上、Otfrid における対語のあり方について、4つの事例をもとに考察したが、残念ながら結論めいたものを導き出すことは未だできない。次回、さらにいくつかの具体的研究を重ね、最終

決済を行なえればと考える。ここでは、現時点までに気づいた点をいくつか指摘しておきたい。

まずは、対語の構成要素の配列に関して。対語も慣用句の一種であるが、慣用句としての「固定性」が必ずしも守られず、2つの配列が並存するケースが、Otfridにおいても他の資料においてもしばしば観察された。今日では、alt und jung ~ jung und alt のような並存もときに見られるとはいえ、おおむねいずれかに落ち着いている。しかし、中世においては融通無碍ともいえる状況で、Friedrich (2006) も多くの対語を、両方の配列で立項している。単に2つの語を並べただけの ad hoc なペアであれば、どの配列でもおかしくないが、慣用句化した対語であれば原則として安定性が期待されるところである。仮にゲルマン語が、日本語のように並列複合語（「父母」「ちちはは」など⁽¹⁵⁾）を主に使用する類型であったなら、かなり状況は違っていたかもしれないが…。なお、Otfrid は脚韻詩であり、この特性を押韻その他表現上の要請のためにある程度柔軟に使用したことは事実である。そして Mhd.（特に詩文）において自在性が強まったと考えられる。とはいえ、armer joh ther richo のように、中世を通じてほぼ同一の配列が取られたものもあり、難しいところだ。

対語の配列を考える上で、押韻とともに形式面で顧慮すべきポイントとして各構成要素の長さがある。前稿（飯嶋 2009: 132）でも言及した「長文肢後置の法則」であるが、今回は gomman inti wib でまさにその反対例が見られた以外は、参考にしうる事例には遭遇できなかった。音節数のほかに、母音の長短、さらにはモーラまで含めて、Otfrid の全事例を対象に調査する必要がある。

構成要素の意味は、もちろん対語の配列に関与する。いわゆる「重要性の原理」であるが、これについても前稿で指摘した。ただ、問題はその「重要性 (Gewichtigkeit)」にある。何がより重要であるのか：大きいものか、強いものか、裕福な者か、身分が高い者か。「優先度 (Priorität)」と取れば、時間的ないし空間的前後関係、原因結果、主体客体なども考慮に入る。しかし、これとて単純に順序付けることは困難である。はたして arm と reich とどちらが優先されるのか、朝と夕とどちらが先か後かなど、判断がつかないケースの方が多いのでは。

意味の分野では「重要性」のほかに、構成要素が反義語であるのか、同義語ないし類義語であるのかなどの問題もある。今回論じたものでも反義語によるペアがいくつかあり、これらは反義でありかつ「相補的」意味分布をなすものでもあった。その結果、「昼も夜も」が「四六時中」、「男も女も」が「皆」という総称的意味を（も）帯びるに至っている。また、本義と転義の並存、原義の喪失など、通時的発展も一様でないことが明らかになった。

しかし、通時的観点から見て、より本質的な問題は、当該の対語がどの歴史段階まで（連続的に）遡れるかという点である。現代ドイツ語の Hof が ahd. hof に発すること、後者がさらに germ. *hufa-z を源とすることは疑えない。単一語の語源は、同一語派・語族内に対応語が見出される限り、同定可能であり、ゲルマン祖語、ときに印欧祖語まで遡及できる。しかし、複合語と

なると、多元発生の可能性が生じる。たとえば、nhd. allmächtig と ahd. alamahtig、さらには現代英語の almighty と ae. ælmihtig の相互関係は、lat. omnipotens をも巻き込んで、実証的な語史的分析を踏まえない限り解明できない。複合語の構造そのものはびたりと整合しているにもかかわらず、である。まして慣用句、それも und を介していつでも形成可能な対語に関しては、構造が一致していても同じ流れを汲むものである保証はない。したがって、Otfrid の hus inti hof が「現象」として nhd. Haus und Hof と同一であるとしても、その「連続性」はあらためて検討しなければならない。

さて、その Haus und Hof に話を戻すと、冒頭でも述べたとおり、これは脚韻詩の中で意図的に使用された頭韻対語である。Otfrid にはほかにも、in wahsmen joh giwizze (Nr.78), wialih joh wanne (Nr.82), in eigan joh erbi (Nr.83), in worton joh in werkon (Nr.85), in munde joh in muate (Nr.115) など十指に余るペアが記録されている。Ahd. の頭韻対語については、Jeep (1987) および Jeep (1995) が刊行されており、特に前者は Otfrid に多くのページを割いている⁽¹⁶⁾。また、現代ドイツ語の対語においても頭韻は脚韻以上のプレゼンスを示している。Hofmeister (2007) のリストには607組の対語が記載されているが、そのうち131組、つまり20%以上が頭韻で結ばれている。脚韻はその3分の1弱の41組に過ぎない。詩の世界では早くから脚韻に取って代わられた頭韻である（その嚆矢が Otfrid !）が、対語を中心とする慣用句においては今なお健在である。ただし、その響きからか、Haus und Hof を含めて、ときにユーモラスな、ときに皮肉的なニュアンスを伴うことは否めない。かつて格調高い詩人語や法律用語として一目置かれていた（頭韻）対語も、今ではどちらかというと「喜劇名詞」に分類されるか。でも、どっこい生きてはいる。

（続く）

付記：古語の表記は原則として一次資料に挙げた刊本に従った。長音符は付さず、表記も若干単純化した場合がある。Ahd. の出典指示は Schützeichel: Ahd.Wb. に、Notker のみ Karg-Gasterstädt/Frings: Ahd.Wb. に従った（出典記載は Piper によるが、私が実際に使用した刊本は King/Tax である）。

注

- (1) 今回から（広義の）中高ドイツ語を、初期中高ドイツ語（1050–1170）と（狭義の）中高ドイツ語（1170–1350）に分けて扱うこととする（年代を含めおおまかな便宜的区分）。
- (2) カッコ内の Nr. は前稿第2章の表2・3（飯嶋 2009: 126ff）における通し番号を表す。
- (3) 対語ではないが、Np 566-18に Ecclesia ist daz hus. Latitudo caritatis ist der hof と、hus および hof が「ペア」をなす箇所はある。ここでの hof を Karg-Gasterstädt/Frings は 1) に分類している。
- (4) 現代ドイツ語では慣用句化した対語は、冠詞類や形容詞を付加することができず、また配列を前後させることも一般に困難である。Er hat Haus und Hof verloren. は可だが、*Er hat sein Haus und Hof verloren や *Er hat sein Haus und seinen Hof verloren は不可だ。また、Hof und Haus も通常の表現ではない。対語を含

む wo sich Fuchs und Hase gute Nacht sagen と含まない wo sich die Füchse gute Nacht sagen を比べてみると、このことはより明確になる。Fuchs und Hase には定冠詞を付けることができず、逆に Füchse には定冠詞を付けなければならない。慣用句化した対語は、無冠詞・無曲用が原則となる。なお、現代でも対語全体が前置詞に支配されることは稀ではない（前置詞も含めて慣用句と見なされる場合もある；[in] Freud und Leid など）が、慣用句であるかぎり個々の名詞の前にそれぞれ前置詞が来ることはない。詳しくは Lambrecht (1984: 760ff.) を参照。

- (5) 中世オランダ語については J.Verdam: *Middelnederlandsch Handwoordenboek*, 253 に huus ende hof が記載されている。古英語 [ae.] や古ノルド語 [anord.] には全く同一の表現は見当たらない。
- (6) これはもちろん、Fmhd. および Mhd. が Otfrid からこの対語を継承したという意味ではない。Otfrid ののみ（偶々）例証される Ahd. の対語が Fmhd. 期以後まで何らかの形で命脈を保ったということ。
- (7) Vulgata では nocte ac die となっている。
- (8) N 以外にも慣用句化してはいないが比較の対照となりうる例がいくつか存在する：dri taga enti drio naht (MF 7-1f); forzug tago inti forzug nahto (T15-2), thri taga inti thriio naht (ib.57-3, 2mal)。さらに Steinmeyer: *Die kleineren ahd. Sprachdenkmäler* 所収の小文献にも次のような例がある（文献名は略しページ・行のみ記す）：uierzig taga unde nahta (137-24f); tages odo nahtes (315-2); uierzog taga unte uierzog nahta (339-2); tages oder nahtes (347-55); dri tag unt dri nacht (351-18)。ラテン語の敷き写しと考えられるものが多いが、すべて tag 先置となっている。
- (9) Hoffmann (1981: 33) によると、Otfrid のカデンツァは基本的に einsilbig volle Kadenz ないし zweisilbig klingende Kadenz あるいは dreisilbig klingende Kadenz のいずれかである。ただし、zweisilbig volle Kadenz も、Otfrid が押韻に不慣れであった初期の巻にはごく例外的に現れる。
- (10) von Lieres und Wilkau (1965: 32f) は naht ~ tac の対語を初期ミネザングから Walther に至る定形的時間表現として捉えている。
- (11) Hel 2482 は C 写本では dages endi nahtes となっているが、これでは頭韻が破格となる。2 行前に同じ dages endi nahtes があることから、nahtes endi dages の方が本来の形か。
- (12) 注 (8) で挙げた Ahd. における日数表示がすべて tag 先置となっているのとは対照的である。
- (13) ただし、man unde wip に関しては、“selten völlig wörtlich auf ein Paar bezogen” として、Heinrich von Freiberg: *Tristan* 3140 の 1 例のみを引いている (Friedrich 2006: 285)。
- (14) たとえば次の 3 組の対語は単なる “jedermann” とは異なる：Chancen gerecht zu verteilen, zwischen arm und reich, Nord und Süd, Mann und Frau... [www.gtz.de/de/15534.htm; 29.9.2011 取得]。
- (15) 並列複合語を好む日本語でも一定配列が支配しているわけではない。「夫婦」「夫妻」に対して「めおと」（沖縄語首里方言 miitu）というのはよく引き合いに出される例である。しかし、一旦確立した「夫妻」を「妻夫」と言い換えるのは、Herr und Frau を逆転させるような訳にはいかない。
- (16) Jeep (1987) は Notker を直接の対象とするものであるが、Ahd. の対語研究に裨益するところ大である。同書は学習院大学の高田博行教授が複写・郵送くださった。厚くお礼申し上げます。

一次資料および出典略記（飯嶋 2009: 133f. 記載分および古英語は略）

古高ドイツ語：

Gl = Die ahd. Glossen. Hrsg. v. E.Steinmeyer / E.Sievers. 5 Bde. Nachdruck. Dublin/Zürich 1968/69.

MF = The Monsee Fragments. Ed. by G.A.Hench. Strassburg 1890.

初期中高ドイツ語：

ÄJud, Siebenz = Ältere Judith, Von der Siebenzahl. In *Kleinere deutsche Gedichte des 11. und 12. Jahrhunderts*.

Hrsg. v. A.Waag / W.Schröder. 2 Bde. Tübingen 1972.

ÄPhys = Älterer Physiologus. In *Die kleineren ahd. Sprachdenkmäler*. Dublin/Zürich ³1971.

- Ava = Die Dichtung der Frau Ava. Hrsg. v. F.Maurer. Tübingen 1966.
- HvMekTG = Heinrich von Melk: Von des todes gehugede. Hrsg. v. Th.Bein u.a. Stuttgart 1994.
- JJud = Die Jüngere Judith aus der Vorauer Hs. Hrsg. v. H.Monecke. Tübingen 1964.
- MemMorri, Merigarto = Memento Mori, Merigarto. *In* Ahd. Lb. Hrsg. v. W.Braune. Tübingen ¹⁵1969.
- MGen = Genesis und Exodus nach der Milstätter Handschrift. Hrsg. v. J.Diemer. Neudruck. Vaduz 1984.
- Rol = Das Rolandslied des Pfaffen Konrad. Hrsg. v. C.Wesle. Tübingen 1967.
- Spec = Speculum Ecclesiae. Hrsg. v. G.Mellbourn. Lund/Kopenhagen 1944.
- WGen = Die frühmittelhochdeutsche Wiener Genesis. Hrsg. v. K.Smits. Berlin 1972.
- 中高ドイツ語 :
- Eckh = Meister Eckharts Predigten. Hrsg. v. J.Quint. Bd.2. Stuttgart 1988.
- Erec = Hartmann von Aue: Erec. Hrsg. v. C.Cormeau / K.Gärtner. Tübingen ⁶1985.
- FreibergStR = Das Freiburger Stadtrecht. Hrsg. v. H.Ermisch. Leipzig 1889.
- Freid = Freidankes Bescheidenheit. Hrsg. v. H.E.Bezzenberger. Neudruck. Aalen 1962.
- Greg = Hartmann von Aue: Gregorius. Hrsg. v. H.Paul / L.Wolff. Tübingen ¹¹1966.
- HvNstGZ = Heinrich von Neustadt: Apollonius von Tyrland, Gottes Zukunft und Visio Philiberti. Dublin/Zürich. ²1967.
- Iw = Hartmann von Aue: Iwein. Hrsg. v. Th.Cramer. Berlin/NY ³1981.
- MarlgPass = Marienlegenden aus dem Alten Passional. Hrsg. v. H.-G.Richert. Tübingen 1965.
- NL = Das Nibelungenlied. Hrsg. v. K.Bartsch / H.de Boor. Wiesbaden ²¹1979.
- Parz = Wolfram von Eschenbach. 7.Ausg. v. K.Lachmann. Nachdruck. Berlin 1965.
- PrBerth = Berthold von Regensburg. Hrsg. v. F.Pfeiffer / J.Strobl. 2 Bde. Nachdruck. Berlin 1965.
- StrAmis = Der Stricker: Der Pfaffe Amis. Hrsg. v. M.Schilling. Stuttgart 1994.
- Tr = Gottfried von Straßburg: Tristan. Hrsg. v. P.Ganz. 2 Bde. Wiesbaden 1978.
- Urk = Corpus der altdeutschen Originalurkunden bis zum Jahr 1300. Hrsg. v. F.Wilhelm. 6 Bde. Lahr 1932-2004.
- 古ザクセン語・中低ドイツ語 :
- Gen, Hel = Heliand und Genesis. Hrsg. v. O.Behaghel / B.Taeger. Tübingen ⁹1984.
- LüStR = Norddeutsche Stadtrechte II. Das mnd. Stadtrecht von Lübeck nach seinen ältesten Formen. Hrsg. v. G.Korlén. Lund 1951.
- RO = Redentiner Osterspiel. Hrsg. v. B.Schottmann. Stuttgart 1975.
- RV = Reinke de Vos. Hrsg. v. A.Leitzmann. Halle 1960.
- SSp = Das Landrecht des Sachsenspiegels. Hrsg. v. K.A.Eckhardt. Berlin/Frankfurt 1955; Das Lehnrecht des Sachsenspiegels. Hrsg. v. K.A.Eckhardt. Berlin/Frankfurt 1956.
- StaStR = Norddeutsche Stadtrechte I. Das Stader Stadtrecht. Hrsg. v. G.Korlén. Lund 1951.
- 古フリジア語 :
- ER = Das Emsiger Recht. Hrsg. v. W.J.Buma / W.Ebel. Göttingen 1967.
- HR = Das Hunsingoer Recht. Hrsg. v. W.J.Buma / W.Ebel. Göttingen 1969.
- RR = Das Rüstringer Recht. Hrsg. v. W.J.Buma / W.Ebel. Göttingen 1963.
- WR = Das Westerlauwersche Recht. Hrsg. v. W.J.Buma / W.Ebel. 2 Bde. Göttingen 1977.

辞典・コンコーダンス・二次文献 (飯嶋 2009: 134記載のものは略)

- Bäumli, Franz H. / Eva-Maria Fallone: A Concordance to the Nibelungenlied. Leeds 1976.
- Hall, Clifton D.: A Complete Concordance to Gottfried von Strassburg's Tristan. Lewiston 1992.
- Hoffmann, Werner: Altdeutsche Metrik. Stuttgart 1981.

Hofmeister, Wernhard: Zwillingsformeln der deutschen Gegenwartssprache. (Stand:14.03.2007)

http://zwillingsformeln.uni-graz.at/Zwillingsformeln-Liste_20070314.pdf

Jeep, John M.: Stabreimende Wortpaare bei Notker Labeo. Göttingen 1987.

Kirchstein, Bettina u.a.: Wb. der mittelhochdeutschen Urkundensprache. 3 Bde. Berlin 1994/2010.

Lambrecht, Knud: Formulacity, frame semantics, and pragmatics in German binomial expressions. *In Language* 60 (1984) 753-796.

Sehrt, Edward H. / Wolfram K.Legner: Notker-Wortschatz. Halle 1955.

Wisbey, Roy: Vollständige Verskonkordanz zur Wiener Genesis. Berlin 1967.

Wisbey, R.A.: A Complete Concordance to the Speculum Ecclesiae. Leeds 1968.

追記：著者の飯嶋一泰氏は病氣療養中のところ2011年11月22日に逝去されました。校正は飯嶋氏の原稿と照合する形で文学研究科ドイツ語ドイツ文学コースにて行いました。